

こぼれ話 21

戊辰戦争戦没者の供養

慶応四年（1868）1月3日、鳥羽・伏見の戦いが始まる。土方歳三率いる新選組は、伏見（京都市伏見区）で会津藩見回り組とともに勇戦しましたが、薩摩軍の砲撃にあい、翌4日淀堤千両松に陣を移しました。ここでも激しい戦闘が続き、六番隊組長を勤めた井上源三郎が戦死、土方は残った兵をまとめて大阪へ引き揚げました。この鳥羽・伏見の戦いの幕府軍戦没者の埋骨地は淀付近に3カ所あり、それぞれに慰霊碑が建立されています。また、本堂に幕府軍の砲弾の跡が残る妙教寺（日蓮宗）には、「戊辰之役東軍戦死者之碑」があります。

昭和四十年代の半ば、京都競馬場の改修工事の折に、千両松の慰霊碑を移転する工事を行っていたときのことです。工事関係者の人たちの夢の中に新選組の隊士たちが出てきて、碑を移転してはならない、きちんと供養してほしいと訴えたそうです。最初は本気にしなかった関係者の人たちも、工事に携わる人たちに起きた度重なる異変のため、永久の施設を建立して、供養を建立して、供養を行うことにしたそうです。

現在の伏見区野所下野にある「戊辰役東軍戦死者埋骨地」慰霊碑の脇には、昭和四十五年六月の京都競馬場関係者建立の碑もあります。

毎年二月四日に妙教寺住職によって供養の法要が行われています。



▲伏見区納所下野で行われている戊辰の役戦没者供養(平成28年2月4日)